

音を愛でる

2 日本語の音



町田 健
MACHIDA Ken
名古屋大学大学院
文学研究科教授

ふだん何気なく使っている擬声語や擬態語を総称してオノマトペと呼ぶ。日本語にはこのオノマトペが、英語のようなヨーロッパの言語と比べて、数も種類もはるかに多い。なぜ日本語において、このオノマトペが発達したのだろうか。

日本語で使われる音

私たちが使う音は、肺からの気流が口から出る間に、声帯、舌、歯などを使って気流の流れに変化を加えることで作られます。音は大きく「母音」と「子音」に分かれます。母音は、肺からの気流が口から出るまでにほとんど妨げられない音で、日本語の「あ」「い」「う」「え」「お」のような音です。子音は、肺からの気流を舌や歯などを使って、途中で妨げることで発せられる音です。日本語の「仮名」でうまく表すことはできませんが、「か」「て」「そ」などをローマ字で書き表したka, te, soのk, t, sという文字で表される音です。世界にあるさまざまな言語で使われている音を合計すると200以上にもなりますが、一つの言語でその全部が使われているわけではありません。日本語で使われている音はそのほんの一部に過ぎず、母音は5個、子音は13個です。母音は、発音する時に口がどれくらい開くかと、発音するときに舌が一番高く盛り上がる位置が口の前の方か後ろの方かという基準で分類されます(表1)。

表1 日本語の母音

	舌の盛り上がる位置	前	後
口の開き	小	i	u
	中	e	o
	大	a	

表2 日本語の子音

	妨げる器官	唇	歯	軟口蓋	声門
妨げの方法	気流停止	p, b	t, d, c	k, g	
	気流の狭め		s, z		h
	鼻腔への通過	m	n	N	

「あ」の音は、口を一番大きく開いて発音されますが、口を大きく開くと舌もその分下がって、その結果盛り上がる位置の前後を区別することが難しくなります。このため「あ」については、舌の前後は中間ぐらいになります。ただし、フランス語や英語では、盛り上がる位置が前の方の「あ」と後ろの方の「あ」が区別されていて、発音記号ではそれぞれ[a]と[ɑ]のように表されます。

子音は、気流の妨げが起こる位置や方法と、妨げを起こす器官(歯、舌、唇など)によって分類されます。母音よりも子音の数の方が多いのが普通ですが、日本語の子音13個は、世界の言語の中ではかなり少ない方です(表2)。

「声門」は、二枚ある声帯の間にできる隙間のことです。「マ行」や「ナ行」の子音(m, n)を発音する時には、肺からの気流が口だけでなく鼻(鼻腔)にも流れます。このため、これらの子音は「鼻音」と呼ばれます。「ん」で書かれる音も鼻音で、発音記号では[N]と書かれます。この音は、正確に言うと舌の奥を「の

どちんこ(口蓋垂)」に付けて発音される鼻音です。英語ではこの音が使われないので、「しんおおくほ(新大久保)」のような言葉を英語話者が発音する

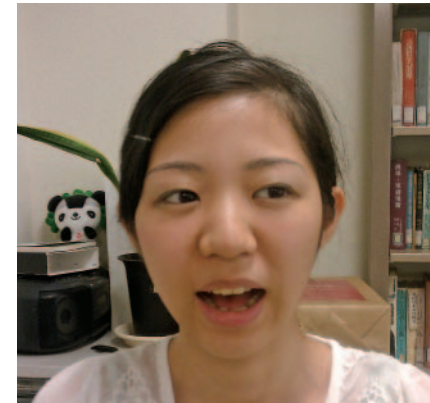


写真1 母音「あ」

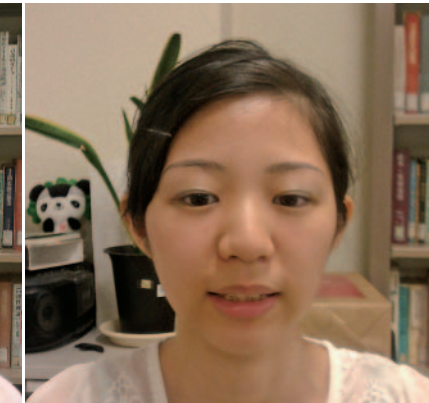


写真2 母音「い」

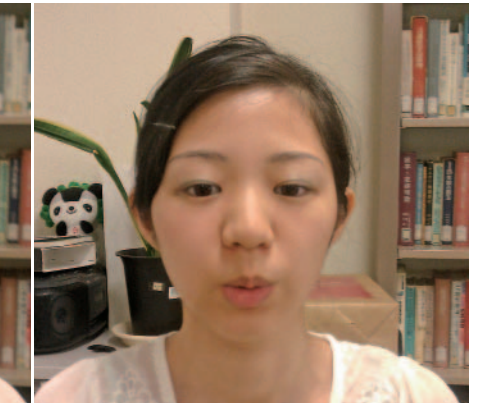


写真3 母音「う」

と「しのくほ」のように聞こえてしまいます。

記号のcで書かれる音は、「ち」や「つ」を発音する時の子音(tʃ, ts)です。実際の発音はそれぞれ違うのですが、日本語の子音組織の中では、同じ音だと考えてよいことにされています。「ハ行」の音も、正確に発音記号で表すと[ha][çi][Φu][he][ho]のようになり、3つの異なる子音が現れるのですが、日本語としては1つのhという子音が使われているとしておいて、特に問題はありません。

このように日本語の音は、全体としては非常に単純な仕組みになっています。英語は、母音が22個、子音が20個だとされており、英語の音の仕組みは、日本語よりもはるかに複雑です。

簡単な音節

[p]や[k]のような子音は、単独で使われることはありません。「ば(pa)」や「こ(ko)」のように、必ずどれかの母音と一緒に使われます。母音の前後に子音が置かれた単位を「音節」と呼びます。日本語の音節は「あ」「い」のように母音だけか、「さ(sa)」や「ね(ne)」のように「子音+母音」という形になっているのが基本で、仕組みとしては非常に単純です。単純なだけに音節の種類は少なく、だからこそ、濁音を含めると70個程度の仮名文字だけで、すべての音節を書き表すことができるのだと考えていいでしょう。

これが英語になると、strides[straiks]のように母音の前後に二つも三つも子音を並べることが出来ます。母音が22個、子音が20個で、1つの母音の前後に2つずつの子音を並べることで音節が作れるのだと

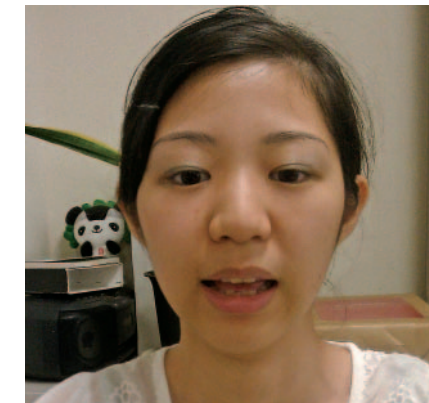


写真4 母音「え」

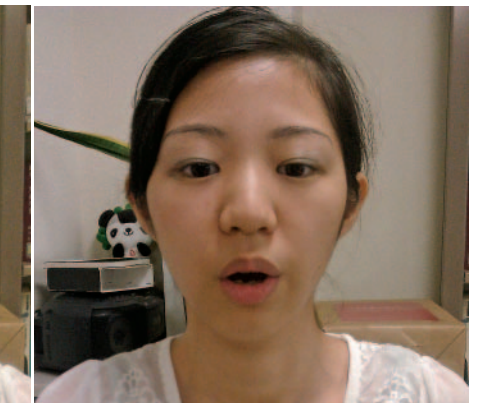


写真5 母音「お」

単純に仮定しましょう。そうすると、英語で可能な音節の数は、次のように計算することができます。

$$22 \times (20C_2)^2 = 22 \times (20! / 18! \times 2!)^2 = 22 \times 190^2 = 794,200$$

日本語の音節数が70個程度でしたから、英語で可能な音節数はその1万倍以上もあります。

定型詩

言語による芸術作品が文学ですが、文学作品として最も古い形式は詩(韻文)です。詩とは、一定の型に従って言葉を並べることで作られる作品のことを言います。日本の詩は和歌や俳句ですが、これらの場合は「五七五」のように、一定数の音節をひとまとまりとする語句を並べることによって作品を作らなければなりません。

一方、英語の詩は一定数の音節から成る行を連ねて作られ、異なる行の音節数が変わることはありません。けれども、連続するいくつかの行の最後の音節が同じになるようにするという「押韻」の決まりには従わなければなりません。

日本語の音節は数が少なく単純なので、押韻のような方法を用いても「イヌがいた。ネコもいた。日

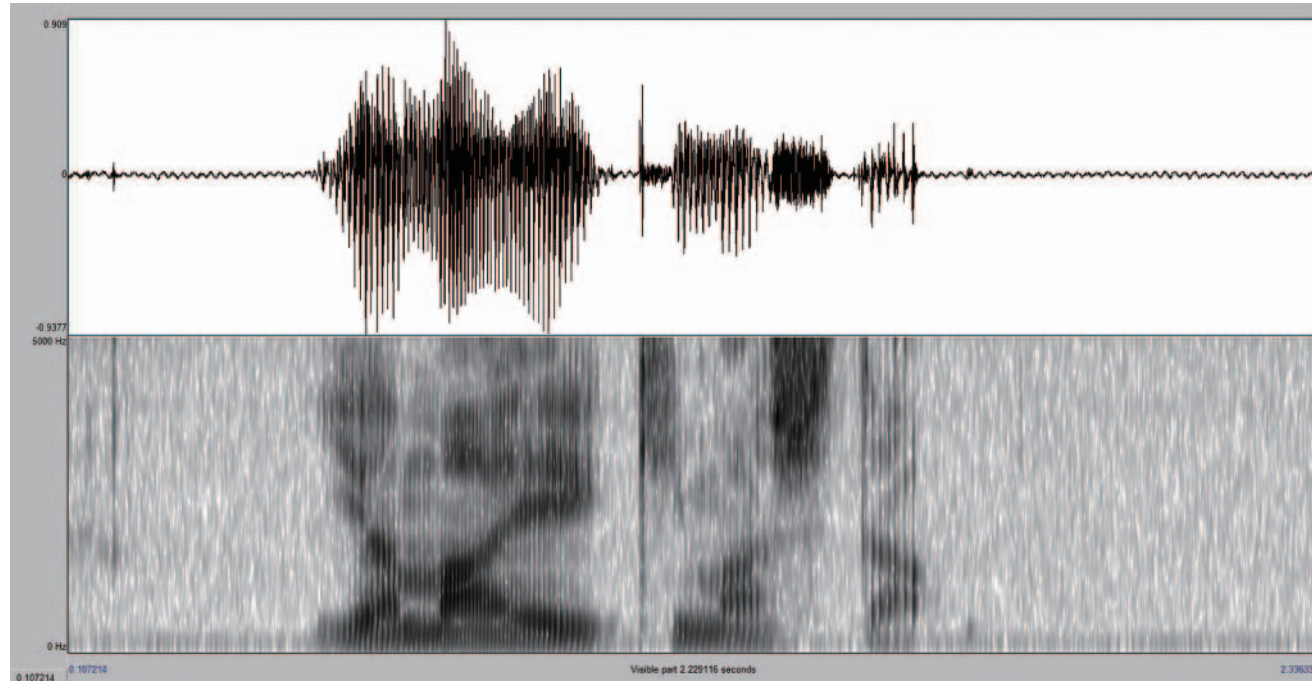


写真6 「山へ行きました」のサウンドスペクトログラム画像。上部は音声の振幅、下部は母音の共鳴周波数

が翳った。雨が降った」のような、音の面では全く面白みのない行が続くことになってしまいます。ある言語表現が「文学作品」としての価値をもつと認定されるためには、表現の技法があまりにも簡単であってはなりません。技法が簡単だと、誰にでもすぐで作れてしまいますから、作品としての値打ちが下がるといことなのでしょう。

音節の仕組みが簡単な日本語を使いながら、文学作品としての評価を得ることができる方法として考え出されたのが「五七五」のような、異なった数の音節からなる表現を単位とする詩型なのではないかと考えられます。

昔のローマ帝国で話されていた言語はラテン語ですが、ラテン語の音節の仕組みも、日本語ほどではありませんが、英語などに比べるとずっと単純でした。ラテン語で書かれた詩で、英語のような押韻という方法が用いられなかったのは、やはり音節の仕組みが複雑とは言えないことが理由だったのだろうと想像されます。

日常の会話で、5音節や7音節だけを単位として表現が作られることは、まずありません。そんな制約があったのでは、言いたいことを自由に表現することができないからです。文学作品としての詩では、表現のためには不便な制約をわざわざ作ることで、表現に型を与えたわけです。型に従って言葉を使いながらも、深みのある内容がきちんと表現できるとい

うことが、人工的な言語作品としての詩に高い価値をもたらすことになります。

「秋来ぬと目にはさやかに見えねども、
風の音にぞおどろかれぬる」(藤原敏行)
という歌が古今集にあります。「五七五七七」という音節単位の語句を並べながらも、晩夏の風情とそれを感じ取る人間の心理を、まことに味わい深く、そして清麗に歌い上げた優れた作品だと思います。音節数の制約の中で言語的な美しさを追究することに、我が国の歌人は力を尽くしてきたのです。

オノマトペ

先ほどの古今集の歌や、芭蕉の有名な俳句「閑かさや岩にしみいる蟬の声」「古池やかはす飛び込む水の音」などの句が、日本の詩作品の代表だとしてよく紹介されます。これらの作品に共通するのは、日本人が自然の「音」に敏感だということです。それは、そこで描かれている音が、誰にでも聞こえる騒音などではなく、耳を澄まさなければ聞こえてこない、ひそやかな音だということでも分かります。

自然に生じる音に対して敏感だという日本人の感性に加えて、日本語には、音節の仕組みが単純だという性質がありました。自然の音は、人間が発音する音とは全く違うのですから、風の音であれ蟬の鳴き声であれ、言語で使われる音で正確に再現することは不可能です。それでも、自分で経験した自然の音

が大体のところどんな感じに聞こえるのかを、誰かに伝えたいという欲求は誰にでもあります。

自然の音を言語で表現したのが「擬声語」と呼ばれる言葉です。自然の音をそのまま言葉で再現するのが不可能だとすると、英語のように音節の仕組みが複雑な言語の場合、言葉で表現される自然の音には、極めて多くの選択肢があることになります。ところが、日本語のように音節の仕組みが単純な言語であれば、選択肢の数はぐっと減ります。

このため、風の音は「ヒュー」だ、蟬の鳴き声は「ミー」だ、水に物が落ちる音は「ポチャン」だ、というふうに、自然の音と言語の音の対応関係がいったん決まってしまうと、それを誰もが覚えて使うようになるための障害はあまり大きくありません。しかも、日本人は自然の音に敏感なのですから、自分の聞き取った自然の音を表現したいという欲求も、他の民族に比べて強いはずです。だとすると、このようにして決められた擬声語を覚えて、実際に使うことに対する抵抗は、それに比べて小さかったものと考えていいでしょう。

日本語は、英語のようなヨーロッパの言語に比べて擬声語の数も種類もはるかに多い言語です。その理由としてあげることができそうなのが、日本人がもつ自然の音に対する感性と、日本語の音節の単純性なのではないかと思っています。

擬声語と並んで日本語に多いのが「擬態語」と呼ばれる言葉です。「雪がちらちら降っている」「花びらがひらひら舞い落ちる」の「ちらちら」「ひらひら」のように、実際には音など生じていないのに、まるで音が出ているかのように言葉で言い表したものが擬態語です。擬声語と擬態語を合わせて「オノマトペ」という用語で呼ばれています。

「オノマトペ」は、古典ギリシア語で「言葉」を意味する「オノマ」と、「作る」を意味する「ポイエイン」を組み合わせて作られた言葉です。「山」や「川」などとは違う、新しい種類の言葉ということでしょう。

「玉がポンポン出てくる」の「ポンポン」は、現実には聞こえる音を表す擬声語です。これを「言葉がポンポン出てくる」のように、音が生じない現象を言い表すために使うと、言葉の出方が目に見えるようで、表現の臨場感が増します。多分このように、表現したい



写真7 「古今集遠鏡」

事柄を生き生きと伝えられる効果が擬態語にあることが理由で、日本語にたくさんの擬態語が登場することになったのだろうと考えられます。

日本語の音と日本語表現の美

オノマトペの多さは、日本人がもつ自然の音、そして自然の情景への妙なる感性と、日本語の音節の簡素さが合わさることが原因で生じた、日本語の顕著な特徴だと言えます。多種多様なオノマトペがあることで、日本語を使った表現が表す内容に具体性と臨場性がもたらされることは確かです。

このため、日本語表現には過剰なオノマトペが使われる傾向があります。「休日のごろごろして過ごす」「街をぶらぶら歩いた」「腹が減っていたのでガツガツ食べた」のように、日常会話にはオノマトペを含む表現がいくらかでも出てきます。いくらオノマトペに具体性があると言っても、何度も使われて手垢がついたものばかりでは、表現の効果が高いとは、必ずしも言えません。

一定の音節数で構成される単位を使うという制約を守りながらも、深い味わいの内容を伝えているというのが和歌や俳句のすぐれた特徴でした。このように、制約の中で高度な技法を駆使することで、言語表現の美しさが生じてくることはあります。オノマトペも、便利であるだけに、使いすぎると表現の美しさが損なわれることにもなりかねません。表現の全体とうまくバランスを取ることが大切です。